

ことわざにみる高齢者像 ―地域のことわざ蒐集から―

穴 田 義 孝

ことわざは、文化人類学や民俗学の口頭伝承分野の方法論であるフィールド・ワークにおいてほとんど採集されることのない対象であった。言語学においてもその無原理性、無法則性、一回性とみなされる故に研究対象とされなかった。そして国語辞典をしのぐ「ことわざ辞典」の量にもかかわらず、その内容は句数の違いがあるだけで五十歩百歩とさえいえる状態である。

そこで改めてことわざを定義してみる。「ことわざは、名も知れぬ誰かに創られ、特定社会の構成員に了解され、共有され、伝承されてきた成句である。」これは文化の定義と限りなく近い。生活様式 (way of life) としての文化概念である。そして了解を覚えている、あるいは知って

いるではなくて特定の句を辞書なしでも理解できる、了解できる句とする。次に既成の句を特定の項目別に集合してみる。分かりやすく事例を挙げると、たとえば嘘について句を集合させてみる。「嘘つきは泥棒の始まり」、「嘘も方便」、ここでは二句だけであるが、集合した句に一貫した、共通する原理・法則・習俗規範を見出すことが可能となる。すなわち、原則として嘘はいけない、しかしそこに誠意があり、状況がよくなる見通しがもてれば、嘘もまた良しという原理・法則・習俗規範である。ことわざをデータ（材料）として、特定社会の成分化されていない習俗規範が析出できるのである。これを「ことわざ社会心理学」と称している。

本研究では、第1に、県誌（史）や市町村誌から特定項目について既成の句を採集してデータとし、地域性に留意しながらその習俗規範を見出そうとする。ことわざ辞典にはなかった新たな句が採集される可能性がある。第2に、特定項目を高齢者、年寄り、老人とする。年寄りとはどのようなもので、プラスイメージやマイナスイメージとしてどのようなことが一貫する習俗規範として了解、共有、伝承されているかなどを析出しようとするものである。それが高齢者像であり、高齢者に関する習俗規範である。

一年目は、沖縄本島・石垣島・竹富島などをことわざの採集地とした。二年目は九州福岡・佐賀厳木町・長崎・大分日田・熊本・鹿児島などとした。新たな資料を得て分析にかかることにしたい。